

阿岐のまほろば

Vol. 17

平安時代の銅鏡が出土

よしみつだに いせき さいじょうちようしも みなが
吉光谷遺跡（西条町下三永）



出土した銅鏡（文様面）

吉光谷遺跡は、国道2号のすぐ北側の丘陵先端部に立地する集落遺跡です。

基盤整備促進事業（ほ場整備）に伴い、1999年5月から約5400㎡の発掘調査を行っています。

調査の結果、弥生時代後期の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、古墳時代後期の竪穴住居跡、平安時代の墓などが検出されています。

そのうち、SK12と呼んでいる^{どこうぼ}土壇墓から、写真の鏡が出土しました。

これは、^{ずいか そうちよう (おう) はちりようきよう}瑞花双鳥（鳳）八稜鏡と呼ばれるもので、^{りよう}八つの稜（突起）をもち、写真の左右対になった鳥（^{ほうふう}鳳凰）と上下に花の文様があしらわれ

ています。^{いあ}鋳上がりはあまり良くなく、文様にシャープさがありません。また^{いがた}鋳型から外したあとに整形したヤスリの痕跡が鏡の縁などにはっきりと見られますが、通常は、やすりの跡が見えないくらい磨きあげて出荷するのが普通ですので、やや手抜き又は量産品といった雰囲気があります。

この鏡は、直径が9.4cm、縁の厚さが3.2～3.5mm、文様の施された部分（内区）の最も薄い部分で厚さ0.9mm、重さは約41gです。

鏡は鏡面を上（文様のある面が下）にして出土しました。広島県内では、八稜鏡の出土例が少なく、東広島市では初めての出土となりました。



銅鏡（鏡面）

出土した鏡の表裏には、繊維が付着していましたが、この繊維を観察すると、通常の布のように格子状に織った痕跡がまったく見られないことから、織布ではなく、繊維を圧縮した毛氈（フェルト）と思われます。

また、鏡の周囲からは黒漆の膜が検出されています。漆膜の滑らかな面は、鏡に接する側だけにあり、反対側は朽ちた木質がわずかに残っています。このことから、鏡はフェルトにくるまれ、漆塗りの鏡箱に入れられて、墓に埋納されていたと考えられます。

この鏡が出土したSK12は、後世の水田造成により上面が削られていて、盛り土や区画の溝などは検出できず、墓穴だけが見つかりました。大きさは、長さ約1.8m、幅60cm、残っている深さ12cmです。



吉光谷遺跡位置図（1：50,000）

この中からは、下の写真のように、土師器の杯・須恵器の杯（写真左上）、瓦器の盃（鏡の下の方から出土）、鉄製の刀子（小刀・写真中央）が出土しています。

これらの出土遺物から平安時代後期（11世紀終り頃）につくられた墓であることが推定できます。



銅鏡の出土状況

この墓に葬られたのはどのような人物だったのでしょうか。この墓は、南に面した、周囲を見渡せる小高い丘陵の先端に位置し、周囲には同時期の墓はありません。

この時期の墓で鏡を埋納することがごく一般に行われていたとは考えにくく、むしろ何もなければ、土器を供えるくらいが一般的だったとおもわれます。また、平安時代後期は、仏教の末法の時期にあたり、その前後に経を納めた経塚が盛んに作られています。経塚には、経を邪鬼から守るために剣や鏡が多数納められていて、鏡は重要な埋納物でした。そのような鏡を個人の墓に埋納していることは、この墓に埋葬された人物が当時かなりの権力者であったことをうかがわせます。

弥生時代の大型建物跡を検出

吉光谷遺跡（西条町下三永）



大型建物跡 (SB14)

吉光谷遺跡は、国道2号のすぐ北側の丘陵先端部に立地する集落遺跡です。

調査の結果、弥生時代後期の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、古墳時代後期の竪穴住居跡、平安時代の墓などが検出されています。

大型の建物跡は、南東向きの緩やかな傾斜の尾根上に作られています。建物跡の北側には排水用の側溝が「L」字状に巡り、この溝に区画された約6×15mの範囲が建物の敷地です。この敷地内に建物の柱穴が10個あります。柱穴の断面を見ると、柱を据えるために一回り大きな穴を掘り、柱を置いて、その周囲に幾度にも土を重ね、たたきしめています。また柱と穴の間に石も入れられていて柱が倒れないようしっかりと支えられています。柱穴は、径が70～90cm、深さ約80～90cmの整

っていない円形ないし楕円形で、柱の直径は25～40cmです。

この柱穴からは、柱部分の土からも柱を据えた土の部分からも弥生時代後期前半の土器が出土し



柱穴の断面



大型建物跡の推定復元図

ています。また建物の側溝内からも同時期の土器が大量に出土していて、この建物跡が弥生時代後期前半（2世紀）に建てられたことがわかります。

この建物跡は、^{はりゆき}梁行約3.2m、^{けたゆき}桁行約8.2mの2間×3間の掘立柱建物跡で、弥生時代の建物跡としてはとても大きなものです。柱の据え方も非常にいいで、相当の重量に耐えられる建物だったと考えられます。

吉光谷遺跡の弥生時代の遺構を見ると、竪穴住居跡に比べ掘立柱建物跡が多く、貯蔵穴とよばれる穴が全く無いという特徴があります。貯蔵穴が無いかわりに掘立柱建物跡（^{たかゆかしきそうこ}高床式倉庫）が多く建てられたとも考えられますが、掘立柱建物跡が竪穴住居跡の3倍近く建てられていることは、集落というより倉庫群といった色合いがうかがわれます。その中でも最大のもので、用途を考えると、倉庫だったのか、^{おき}長の住居だったのか、あるいは、^{しんでん}神殿だったのかと興味がつきません。

編集後記

今回は、吉光谷遺跡の特集号となりました。吉光谷遺跡は基盤整備事業と砂防事業の2つの事業をあわせて3月一杯まで調査が行われています。

なお、次号は整備に伴い調査を進めている史跡安芸国分寺跡を特集する予定です。 (T. I)

「阿岐のまほろば」は、東広島市内の発掘調査を速報的にお知らせするため、無料の不定期刊行としています。市役所・市民文化センター・図書館などでお受け取りください。また、在庫がない場合は、直接文化財センターにご連絡ください。

東広島市教育文化振興事業団 文化財センター報

阿岐のまほろば Vol. 17

発行日 1999(平成11)年12月3日

編集 財団法人東広島市教育文化振興事業団/文化財センター

発行 東広島市西条町大字馬木541-1

TEL 0824-25-3880 739-0033

印刷 電子印刷株式会社

広島市中区堺町1-1-5